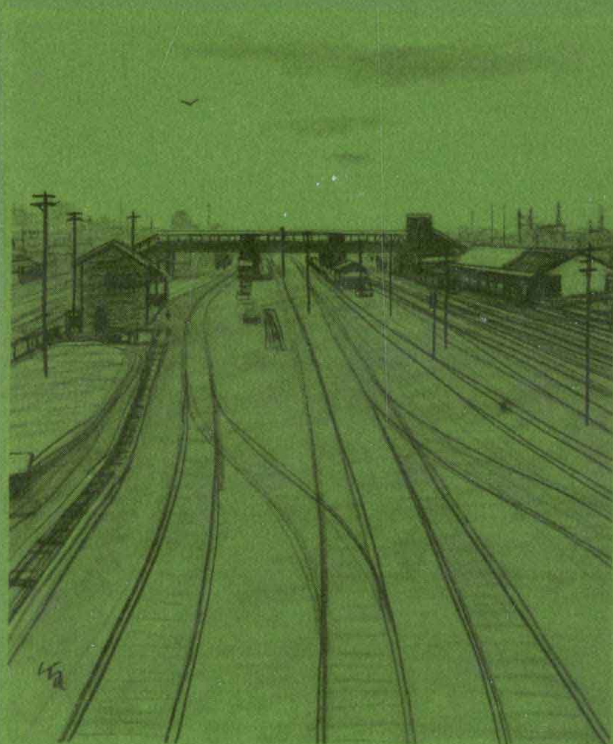




五木寛之

青春の門

墮落篇
上

講談社

青春の門 第四部 墮落篇 上

著 者 五木寛之

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二 振替 東京 八一三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

第一刷発行 昭和五十一年九月三十日



©五木寛之 昭和五十一年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。

(文2)

Printed in Japan

目次

英治との再会	5
倦怠の季節	29
華やかな誘惑	85
新しい世界へ	118
織江との訣別	141
プロコフィエフ七番	166
新宿の夜の大学	199
竜五郎への手紙	238
人気歌手の条件	249
雨の夜に墮ちる	264

表紙絵

さしえ

風間
完

題字

菅
甘林

装幀

村山豊夫

青春の門

墮落篇

上

英治との再会

北国の春はおそい。

日本列島の南では、とくに人々がコートをぬぎすて、樹々の青葉が日の光にかがやいているころ、北海道ではまだ頑固な根雪がのこっている。

つめたい風の中を、信介は齒をくいしばって走っていた。肘を左右にはり、重いハンドルをしっかりとささえながら夜明けの道を走っている。

彼が運転しているのは、運送用のオート三輪だ。馬にまたがるようにサドルに腰かける跨座式バーハンドルの、単気筒 $\frac{3}{4}$ トン積みのダイハツである。小型トラックとオートバイのあいの子のようなその車は、運転席がむきだしになっていた。あたらしい年式のものにはそうでないタイプの車もあるが、いま彼がのっているのはボンコツ寸前の古い型なのだ。風はようしやなく皮膚につき刺さってく

る。鼻の奥が痛みだし、涙が目がしらにたまってきた。彼は片手で風防メガネをおしあげ、目を手の甲でこすった。

枯れた林の中の道は、固く凍てついている。朝の光はまだ木々にさえぎられて、あたりには寒気が厳しくはりつめていた。道の両側はシラカバの樹林だ。そのあちこちに雪がまだらに見える。

へこたえるなあ

信介はアクセルをもどして、スピードをゆるめた。エンジンが老人がせきこむような音をたてて不機嫌に回転をおとすと、風圧がやわらぎ、すこし呼吸がらくになった。鼻先にどうやら感覚がもどってきた。

へもうすぐだ

あと二十分も走れば、目的地につくだろう。そうすればストープで体を暖められる。調理場の人から熱いミルクの一杯ぐらい、ごちそうしてもらえるかもしれない。

行先は札幌市の郊外の支笏湖に近いホテルだった。ふつうなら宿泊客の足もとだえて、がらんとしている時期なのだが、この数日、めずらしく何かの集会が行なわれているらしい。そこへ食料品をとどける仕事で信介は朝の道を走っているのだ。

林の中の道は、ゆるやかにカーブしながら次第に湖のほうへむかっていた。橋を渡り、のぼり坂になつて丘の道にでると、不意に視界がひらけた。

鉛色の支笏湖は、朝の光をによく反射して静まりかえっている。霧が湖の西側によどんでいた。左側に奇妙なかたちをした山が見えた。帽子をつぶしたような紫色の山だ。樽前山というその山の名前



は、信介も知っていた。その右手につづく青黒い山が風不死である。それはどこともなく無気味な雰囲気を感じさせる山だった。風不死の山容といい、重くひろがる湖面といい、この湖の風景には一種のすごみのようなものが奥にひそんでいた。

支笏湖へくるのは三度目だが、信介はそのたびにことなつた印象をうけている。それはひとことでは言いあらわしようのない、不思議な感覚だった。

心のどこかに、その風景から目をそむけたいような気持がある。それでいてどうしても目をそらすことのできない吸いよせられるような魅力も感じるのだ。暗くて深い非現実の奈落の底へずるずる引きこまれてゆくような不安と、そしてまた、そのままどこまでも落ちこんでゆきたいような危険な誘惑と、その両方のからみあつた得体の知れない衝動で心が波立つのだ。

へ人間が自殺を考えるのは、ひょっとするとこんな風景の前に、ひとりで立っているときなのかもしれない。

信介は注意して急な下りのカーブを回りながら、そう思った。

へあの湖に身を投げると、死体があがつてこないとかいってたな。

以前、そんなことを誰かに聞いたおぼえがあつた。支笏湖の底は、おそろしく深いらしい。その最深部のどこかに水の噴きだしている穴がある。そのため湖底に複雑な水流が生じていて、死体はその水の流れにのつていつまでも湖底をめぐり続ける——、という話なのだ。信介はそれを単なるつくり話だろふと思つていた。どうせ人をこわがらせてよろこぶ連中の創作にちがいない。

だが、今朝はなぜか、そのことが本当のように思われてならなかった。人の心の中には荒涼たる風

景に惹かれる気持もあるのだ、と信介は自分で自分に言いかけながら、急な下り坂を慎重にブレーキングしながら降りていった。

やがてホテルの建物が見えてきた。古風な山荘風のつくりである。煙突から薄青い煙があがっていた。あたりに人影はなかったが、調理場の連中がもう働きはじめているのだろう。急がなくてはならない。

信介は建物の裏手に車をとめた。エンジンを一度、からぶかしさせて切ると、荷台のおおいを外して荷物をおろしにかかった。

「おそいじゃないか」

髪をリーゼント風になでつけた若い男が出てきて言った。額に青い血管が浮き出て、それがビクビク動いている癪の強そうな青年だった。

「さっきから札幌のほうへ二度も電話したんだぞ」

「すみません」

信介は荷台の上にあがると、重い紙包みの一つを両手でかかえて、その男に手渡そうとした。

「なんだよ。おれに手伝わす気か」

相手の男はポケットに両手をつっこんだまま、横柄な口調で言った。

「急ぐんなら、手伝ってくれたっていいじゃないですか」

信介はむっとして言い返した。

「おそくなったのは市場のほうで準備ができてなかったからです。ここまでくる途中はそんなに時間

はくってないですよ」

「そんなこと知るか。こっちは約束の時間に約束の品物がつくのを待ってたんだ。文句をいわずに早くはこべ」

「はい。わかりました」

信介は荷物をかかえたまま荷台からとびおりた。その瞬間、凍っていた土の上で足をすべらせて、彼は勢いよく尻もちをついた。はずみで新聞紙に包まれた重い紙包みが、彼の手からどさりと地面にころがった。

「なにをするんだ、このやろう！」

若い男は顔色をかえてどなった。

「客の口にはいる品物だぞ。いったい何だと思ってるんだ。近海物のマグロを石炭袋みたいに投げだすやつがいるか！」

「わざとやったんじゃないです」

「なんだよ、おい——」

男の口調が変わった。彼は目をつりあげて、いきなり信介の肩をつきとばした。中腰になっていた信介はあっけなくうしろにひっくりかえった。一瞬、手で体をかばったとき、なにか冷たいものが掌にあたった感じがした。

「早くやれ！ こっちは急いでるんだぞ」

彼の口調には、この土地の人間でないことをしめす独特の巻舌の響きがあった。頬の端にはねたよ

うなかな傷のあともあり、動作や表情にどことなくけわしい雰囲気を持ただよわせている青年だった。

「無茶をしないでください」

信介は転がった紙包みを拾いあげながら、おだやかに言った。板前の世界や、職人たちの間には、時たまこういうタイプの男がいることを信介は知っていた。突然かつとなると人が変わったように片意地になって、凄^すんだりする連中だ。つきあってみると、案外気のよい好人物だったりもするのだが、ひとつ扱いかたを間違えると厄介なことになる。

信介は下手^{したて}に出て、その場をやりすごそうと目をふせた。すると、ふと、なにかぬるぬるした生暖かいものが掌の中に感じられた。

「どうしたんだろう？」

信介は自分の左手に目をやった。そして思わず眉をひそめた。

掌が真赤にそまっている。したたりおちる血が、指をつたってズボンをぬらしていた。おそらく突き倒されたときに体をかばって、地面に手をつき、ビールびんのかけらかなにかで掌を切ったのちがない。

「ひどい——」

信介は口にださずつぶやいて相手の男をにらみつけた。

「なんだ、おい。文句でもあるのか」

若い男は薄笑いをうかべて肩をそびやかした。彼は信介の手にしたたる血を平然と眺めている。信

介の頭に、かっとな熱いものがひろがった。傷つけられたことよりも、それを見て薄笑いをうかべている相手の表情に怒りを感じたのだ。

「畜生！」

信介は衝動的に両手にかかえた重い紙包みを、力まかせに相手に叩きつけた。その紙包みが鈍い音をたてて男の胸にぶつかり、相手は二、三度たたらをふんで背後のドアに突きあたり、その反動で両手について前に倒れた。

「やりやがったな」

男は両手の泥をはらうと、ゆっくりおきあがった。彼の額の青筋がふくれあがり、生きもののよう^{けいれん}に痙攣した。彼は突然、身をひるがえして、調理場に姿を消した。

「ばかやろう」

信介は血のしたたる掌に口をあててつぶやき、傷口を舌でなめた。不思議にあまり痛さは感じなかった。

ふたたびその男が飛びだしてきたとき、信介は手ぬぐいを裂いて左手をしぼろうとしていたところだった。

男は血の気の引いた異様な顔をして、目がすわっていた。手になにか白い光るものをにぎっている。それが氷を割るときに使う大型のアイスピックだと信介が気づくまでには、何秒かの時間が必要だった。

「やめろ」

信介は思わず逃げ腰になりながら叫んだ。

「ばかなまねはよせよ！」

若い男は何も言わなかった。肩で荒い呼吸をしながら信介のほうへまっすぐ近づいてきた。両手でアイスピックを右の腰に固定して、体ごとぶつかってくる気らしい。

信介は傷の痛さも忘れて駆けだした。相手は何か意味のわからない叫びをあげながら追ってきた。

信介はホテルの本館の横を回って、生垣をハイジャンプのようにとびこえた。そこは湖に面した食堂の内庭になっている。アイスピックをかまえた男と信介の距離がちぢまった。彼は塀にそって左へ走った。建物の一部が山荘風の離れになっていた。その先は行きどまりらしい。

「この野郎！」

背後で男のあえぐような声がした。信介は逃げ場を失って、反射的に目の前の離れの建物のドアをあけ、部屋の中へ長靴のままとびこんだ。

「なんなのよ！」

びしりと鋭い女の声が信介の耳にひびいた。カーテンをひいた薄暗い室内の隅で、白い影が素早く身をおこすのが見えた。若い女である。彼女はなにひとつ身につけていなかった。暗い部屋の中で、白い水鳥が羽をひろげたような錯覚を信介はおぼえた。彼は仰天してその場にたちすくんだ。

そのとき、信介につづいて男がとびこんできた。

「逃げるな」

若い男はアイスピックをかまえて信介に迫ってきた。

「なにさ、あんたたち！」

その時、甲^{かんが}高い女の声が突きささるように部屋の中にひびいた。歯切れのいい伝^{でん}法^{ぽう}な口調だった。「ひとが寝てるところへ土足で踏みこんできて、一体なんだっていうの！ 軍^{ぐん}鶏^{てい}の喧嘩^{けんか}じゃあるまいし、みっともない真似はやめてもらいたいね」

「やかましい。女はひっこんでろ！」

若い男が叫んだ。

「なんだって？ もういっぺん言ってごらん」

女は裸のまま、信介と若い男の間にすつと割りこんできた。彼女は、はっきりした口調で言った。

「あんた、女がどうしたっていうのさ」

「刺すぞ」

若い男が唸った。

「けがをする前に、そこをどくんだ」

「あら、まあ、おっかないことを」

女は頭から相手を小馬鹿にしたような笑顔をたてた。若い男が白い歯をむきだした。彼は片手をのばして、女の白い二の腕をつかんだ。

「なめた口きくんじゃないぞ、女のくせに」

「へえ、凄^{すご}んでるのかしら、この人」

「気が狂ってるのか、おい」